

乳腺粘液癌 19 症例の細胞学的検討

◎吉沢 咲恵¹⁾、山本 伸晃¹⁾、沼田 結衣¹⁾、中谷 穂¹⁾、菅原 恵子¹⁾、北沢 敏男¹⁾、村田 有也¹⁾、白石 淳一¹⁾
独立行政法人 国立病院機構 東京医療センター 臨床検査科¹⁾

【はじめに】乳腺粘液癌は浸潤性乳癌の特殊型に分類され、神経内分泌への分化を伴うこともしばしば認められている。乳癌全体の約 2%を占めている比較的稀な腫瘍である。乳腺粘液癌は時として超音波検査などの画像診断上、良性腫瘍と鑑別が困難な例がある。一方、穿刺吸引細胞診検査においては、その特徴的な細胞像をとらえることができれば、有用な診断法となる。今回我々は当院で経験した乳腺粘液癌の細胞像について、後方視的に検討を行ったので報告する。

【対象・方法】当院で 2002 年 1 月～2021 年 7 月の 19 年 7 か月の間に乳腺の穿刺吸引細胞診検体で粘液癌と診断され、その後の手術材料でも病理組織学的に純型の粘液癌と確定診断された 19 例を対象として細胞学的検討を行った。

【結果】19 例のうち、全ての背景に粘液が認められたが、炎症は 2 例、出血は 4 例、壊死は 2 例で認められた。また、ほぼ全ての症例において、背景に線維血管性間質の集塊の出現がみられた。出現様式については、19 例中孤在性が 16 例、マリモ状が 14 例、粘液湖の中に浮かぶような集塊

が 15 例、シート状が 15 例となった。ほとんどの腫瘍細胞は N/C 比が高く、核形は類円形で、クロマチンは細顆粒状を示し核小体はほとんど目立たなかった。また、19 例中 5 例は神経内分泌への分化を示す粘液癌であった。この 5 例では、他の 14 例に比べ出血性が目立ち、線維血管性間質の集塊がより多く出現していた。腫瘍細胞の核は偏在性で、顆粒状、空胞状の豊富な胞体を有していた。なお、5 例中 2 例では細胞診検査の段階で神経内分泌への分化が推定されていた。

【まとめ】乳腺粘液癌はまれな組織型であるが、細胞学的特徴が独特であるため、細胞所見をしっかりとらえることができれば、細胞診検査が確定診断となりうる疾患の 1 つと考えられる。また、線維血管性間質の集塊や、特徴的な細胞形態などに注目することで、神経内分泌への分化も推定が可能と考える。今回我々は、乳腺粘液癌の細胞像を再検討することで乳腺粘液癌の診断に対する細胞診の有用性は高いと再認識することができた。

03-3411-0111 内線:4330